

2. さくらの現状と問題点

1) さくらの生育状態

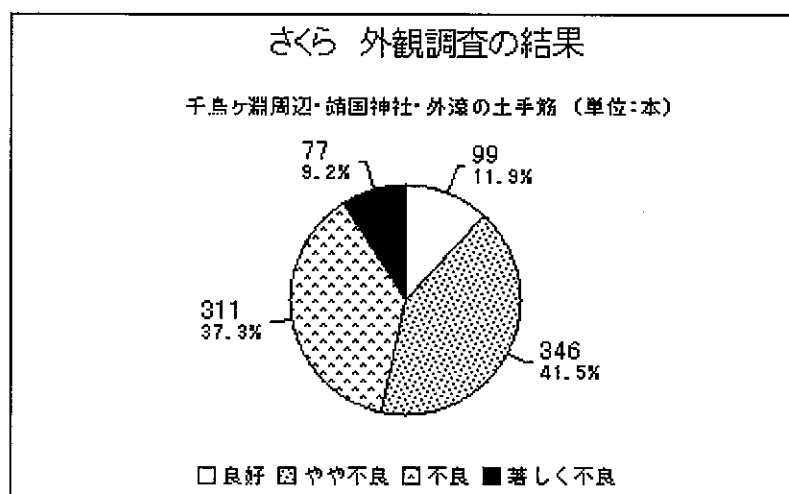
千代田区内の調査対象地 20 地点のうち、特にさくらの傷みが激しいと思われた千鳥ヶ淵緑道（隣接する濠側法面に植栽されたものを含む）、千鳥ヶ淵公園、靖国神社（神社の外周部と境内奥の樹林内に植えられたものは除く）、江戸城外濠の土手筋の各地点の合計 833 本について、外観調査によってさくらの生育状態の評価を行った。

今回用いた生育調査の評価の基準は以下のとおりである。

評価のランク		さくらの生育状態
評価 1	良好	生育障害はわずかに見られるものの、影響は軽微である。 将来的に見て、このままの状態でも大きな支障はないと考えられるもの。
評価 2	やや不良	生育障害は認められるが、大きな影響は与えていないもの。 現状では大きな問題は見られないが、近い将来には問題は顕在化する可能性があるもの。
評価 3	不良	明らかな生育障害が認められ、直ちに樹勢回復のための再生対策が必要なもの 例、コフキタケ、ベッコウタケの付着、 幹の空洞化 被圧による樹形の乱れが見られるもの
評価 4	著しく不良	生育障害の影響は既に顕著であり、伐採の対象となるもの 例、ナラタケ病の発病 樹形が著しく乱れており回復の可能性なし 主幹など樹木の大半が枯れているもの 倒木の危険性が高いもの

調査結果から、将来的にみても問題がないと判断されたもの（評価 1）は 99 本、全体の 11.9%に留まり、現状では問題はないが近い将来には何らかの生育障害が現れる可能性があるもの（評価 2）が 346 本、41.5%と最も大きい割合を占めた。また、明らかに生育障害が見られ直ちに対策を要するものが 311 本、37.3%、既に生育障害の影響が顕著で伐採することが適当と判断されるものが 77 本、9.2%を占めた。

したがって、現状のままで放置しておいても何ら問題がないものは約 1 割（11.9%）に留まっており、全体の約半数（46.5%）のもので既に生育障害が認められ、うち約 1 割（9.2%）のものが伐採することが適当と判断されるものであった。

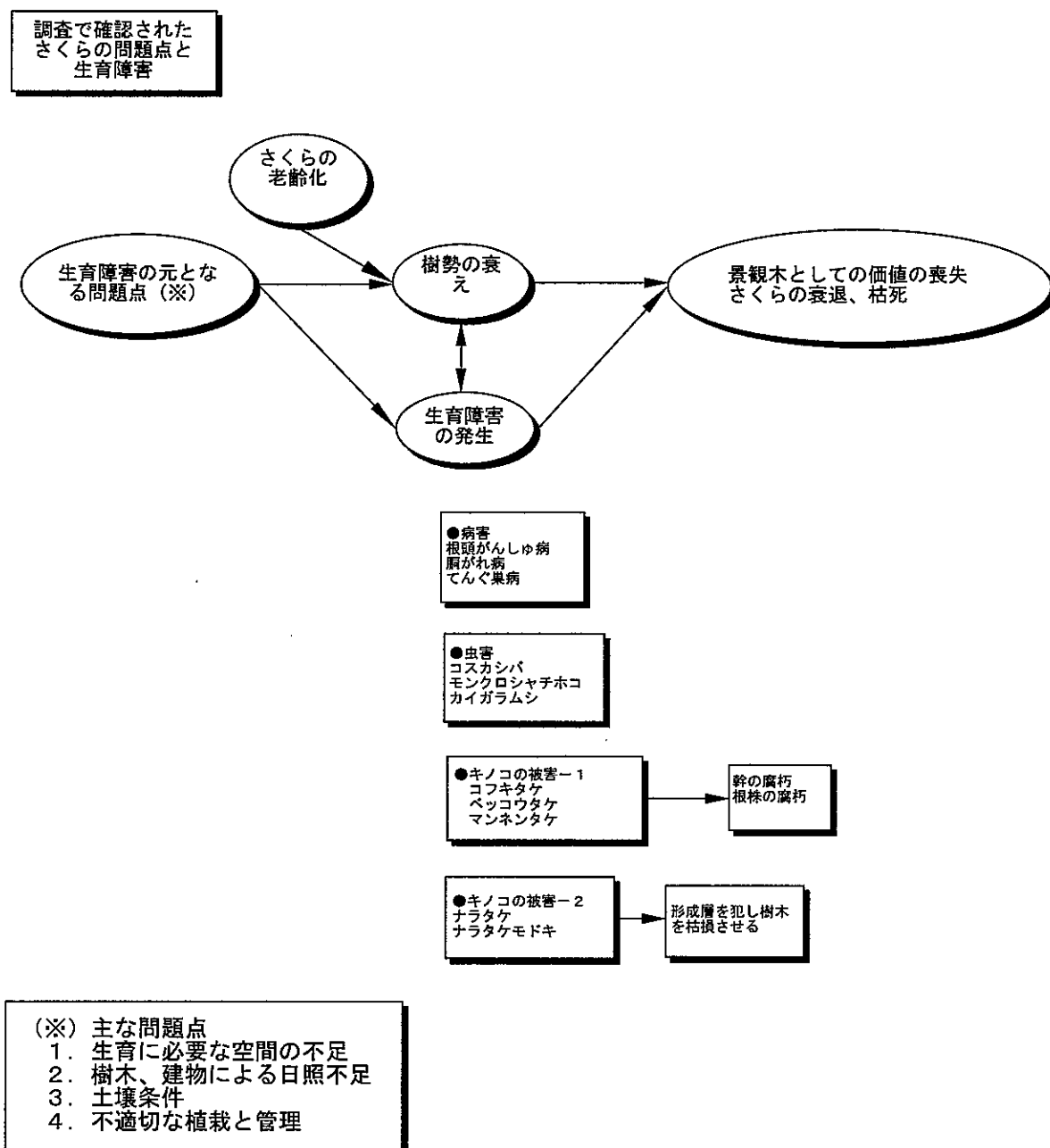


2) 生育障害の要因と問題点の整理

千代田区内のさくらが衰退・枯死した要素としては次の3要素が考えられる。

- さくらが老齢化することによる樹勢の衰え
- 生育障害を誘発させる原因となっている環境要因などの問題点の存在
- 病虫害やきのこによる被害など、さくらに生じた具体的な生育障害の発生

これらの関係を図化すると下図のように整理できる。



3) 対策・さくらの育成管理

今後、健全なさくらを維持するために、その状況に応じて、毎年定期的に行う永続的な管理、樹勢の衰えたさくらに対する再生管理、さくらの後継樹を育てる更新管理の3つの内容でさくらの育成管理を行う。

(1) 永続的な管理（全樹木対象）

主旨	・美しいさくらを咲かせるために永続的に行う管理項目。 ・さくらの樹勢を保つことによって病虫害など生育障害に対する抵抗力を高める。
対象	全てのさくらを対象に毎年（管理項目によっては、ローテーションを組みながら）定期的に行う。
内容	①生育状態の観察 ・樹勢調査 ・管理作業のための観察 ② 剪定作業 枯れ枝や病虫害に犯された枝を剪定し、花着きを良くしさくらの美観を維持する。 ③ 壺肥、施肥 さくらの新しい根を発根させる壺穴を掘りながら肥料を施す。 ④ 踏圧防止対策 ・根元への地被類の植栽 ・人留め柵の設置 ⑤ 虫害対策 ⑥ 病害対策 ⑦ 安全対策 ・倒木の危険度診断 ・頬杖による枝折れの防止

【参考資料】 年 間 管 理 計 画

項 目	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
さくら生育状態				開花 開葉							落葉期	
樹勢調査				① 花の観察			② 葉・枝の観察				③ 落葉の観察	
病虫害・枯れ枝の観察				① てんぐ 果対策		② モノロ コシハ 発生状況	③ アサヒ コシハ 枯れ枝	④ モノロ コシハ	⑤ ナラタ ケ対策			
剪定管理	枯れ枝 剪定 枝抜き			てんぐ 果病枝 の除去			枯れ枝 剪定 ヤゴ取り					
壺肥・施肥	壺肥				施肥・壺肥							壺肥
安全対策										安全対策		
病虫害の発生時期												
モノロコシハの食害時期												
コシハ幼虫の食害時期												
アサヒコシハの成虫発生時期												
ナラタケの発生時期												

(2) 再生管理

主旨	既に生育障害が生じているさくらについて、再生によって保全を図るための管理
対象	植栽地全体にさくらの生育障害が見られ、放置しておけば樹勢の衰退が進む場所や枯損の可能性がある場所を対象にして行う。
内容	①日照条件の改善 ・周囲の高木の伐採、剪定 ・さくらの間伐（さくらの密度管理） ②土壌条件の改善 ・表層土の耕起 ・壺肥 ・空気圧入による土壌改良（ピックエアレーション） ・壺肥＋ピックエアレーション ・帯状土壌改良 ・縦穴掘削による排水確保 ・踏圧防止対策 ③植栽地の改修 ・根囲いの改修 ・舗装面の改修と導根装置 ④不定根誘導による幹の更新

(3) 更新管理

主旨	計画的な間伐と捕植によって、さくら後継樹の育成や安全性の維持を図りさくら植栽地の景観を守る。
対象	生育障害によって既に樹勢の回復が望めないさくらや、倒木の危険性が高いさくらを対象とする。
内容	①植栽余地の確保と後継樹の育成 ②ならたけ病対策 ・罹病木に対する処理 ・感染対策 ③いや地対策 ・さくらの根はできるだけ広い範囲で取り除く ・土壌を深さ 80cm 程度まで、水はけの良い土と入れ替える ・完熟堆肥を 20%程度混入し、1 年間なじませる ④補植

コラム1. さくらの特性

1) 陽樹である

さくらは常に十分な陽光を要求する樹種であり、他の樹木や建物の陰などで日照が不足すると樹勢が弱まります。したがって、日当たりが良く、十分な広さがある場所に植栽することが必要です。

2) 成長が早い

活性が高く成長は早いですが、その反面十分な水や酸素を必要とします。そのため、水や酸素が不足すると病害に掛かりやすくなります。

3) 浅根性である

根系分布が浅く、多くの根は地表近くをほうように伸びています。そのため根元周りに人が入り込み、土壌が踏み固められると生育不良となります。

4) 腐朽病害に対する抵抗性が低い

「さくら切るばか」と言われるように、さくらは傷をつけられるとそこから腐朽菌（注1）が侵入し、幹や根を腐朽させることが多くなります。このことがさくらの寿命を縮める致命傷となっていることが少なくありません。

注1・・・木材を腐らすキノコ類。

5) 幹の再生能力は高い

さくらは活性が高いことから、腐朽の進んだ幹の部分から不定根（注2）といわれる根を出すことがあります。この不定根が下方へ伸びてゆき地面に届くことによって、肥大成長してゆき、その部分が新しい幹として再生することがあります。

注2・・・若枝を挿し木にした時に出る根のように、本来の根がでる位置とは異なった場所からでる根の総称。

6) いや地現象が見られる

いや地現象とは、以前さくらが植えられていた場所に、後継のさくらを植えても通常の場合に比べて成長が悪くなる現象です。